

塩谷 光彦 東京大学大学院理学系研究科 教授

「岡崎」の研究所



しおのや・みつひこ

1978年 東京大学理科II類入学
 1982年 東京大学薬学部卒業
 1984年 東京大学大学院薬学系研究科修士課程修了
 1986年 東京大学大学院薬学系研究科博士課程退学
 1986年 広島大学医学部 助手
 1988年 岡崎国立共同研究機構 分子科学研究所 助手
 1990年 広島大学医学部 助手
 1991年 広島大学医学部 講師
 1994年 広島大学医学部 助教授
 1995年 岡崎国立共同研究機構 分子科学研究所 教授
 (総合大学大学院大学教授併任)
 1999年 東京大学大学院理学系研究科 教授 現在に至る

岡崎と言えば、徳川家康（岡崎城）や三河武士、東海道宿場町、NHK「純情きらり」や八丁味噌、といったところが一般的なイメージかもしれない。一方、分子科学者にとって真っ先に思い浮かぶのは、分子科学研究所（分子研）をはじめとする「岡崎」の三つの研究所である。「岡崎」イコール基礎科学研究のメッカなのである。そして、私が関わりのある分野の外国人研究者にも、「岡崎」の研究所と言えば、すぐに通じるのである。私は分子研には、二度お世話になった。研究ができる環境で、しかもまったく異なる立場で、というケースは、それほど多くないかもしれない。

博士課程を中退後、東京から広島に移動したのは、1986年7月の梅雨明けの頃だった。東京駅で研究室の皆さんに見送られて、リュック一つで広島に向かった。それまで、大阪より西側に行ったことがなかったので、車窓を流れる夏の風景をずっと飽きることなく眺めていたことを覚えている。広島

駅に着くと、近くの金物屋で茶碗セットとついでに箸を一本買い、一時的に住まわせてもらうことになった米国留学中の黒崎君（後に、分子研で同僚となる。現在、金城学院大教授）のアパートに向かった。この移動には、研究上でも個人的にも、大きな覚悟が必要であった。木村榮一先生の研究室の一員として、新たに錯体化学や生物無機化学の領域に足を踏み入れることになり、学生時代に学んだ有機合成化学が大きく膨らんでいく高揚感があった。

最初の「岡崎」

分子研との出会いは、その約一年半後に突然やってきた。広島の気風や大環状ポリアミンの化学にやっと馴染んできた頃だったが、木村榮一先生が錯体化学実験施設の錯体合成部門（流動部門）教授を2年間兼任されることになり、私はお供をさせていただくことになった（現在は、錯体化学実験施設は、生命・錯体分子科学研究領域の一部として改組され、錯体合成部門は今は無

い）。岡崎も分子研も、何も知らないまま、最低限の荷物を小型トラックに載せ、単身で美合町五本松の宿舎に向かった。研究所では、しばらくは木村先生と二人だけだったが、その間、研究棟の大きな二つの部屋を整理し、数名が合成実験ができる環境を整えた。この頃は夕方、食堂地下で木村先生と卓球をして、国道483号線沿いのお決まりの中華料理屋に行くのが日課だった（懐かしい!）。後に、先ほどの黒崎君と博士学生の黒木君（現在、大鵬薬品工業）が広島から合流し、さらに夏休みになると学生がどっと押し寄せ、我が家は合宿所と化した。。細かいことはどうあれ、賑やかな研究室は楽しかったし、新しい金属錯体の研究も着実に進んだ。そして、1年も経たないうちに、新しい南実験棟が竣工を迎えた。何も無い部屋に、巻き尺を使って実験台の位置を決めたり、水道・ガス、排気口や排水溝をアレンジし、当時3人で台車で引っ越したのは貴重な体験である。

当時、錯体化学実験施設では、第二代

施設長の故大瀧仁志先生が、錯体化学研究所設立や錯体化学国際会議(1994年、京都開催)の準備に奔走されていた。特に、アジア諸国との学術交流やネットワーク構築には、早い時期から重点が置かれていた。「岡崎」は、物理化学のみならず錯体化学の分野においても、その高い求心力を発揮し続けていた。当時30代半ばの北川進先生、山下正廣先生、西原寛先生を始めとする若手の錯体化学者や、分子研の大塩寛紀先生、増田秀樹先生、鳥海幸四郎先生が中心となり、錯体化学の将来に関する議論が活発に交わされていた。このような時期に岡崎で過ごした2年間で、分子研は錯体化学のハブであることを肌で感じる事ができた。

二度目の「岡崎」

二度目の思いがけない機会は、広島に戻ってから約5年後の1995年4月に訪れた。このときは、広島から家族3人を連れていたので、美合五本松よりずっと近い竜美丘の宿舎に住むことになった。この宿舎には、分子研だけでなく基生研や生理研の先生方も住んでおられ、週末の草刈りや掃除、子供の幼稚園や小学校を介して、家族ぐるみで仲良くしていただいた。

当時は、田中晃二先生(錯体物性部門)が第三代施設長を務めておられ、私は隣の錯体触媒部門を主宰することとなった。やはり、最初の仕事は、実験室の掃除と合成実験の準備から始まった。二度の研究室立ち上げで、エバポレーターや真空ポンプの組み立て・分解、そして掃除だけは、結構得意になったと思う。伊藤光男所長のご配慮で、ポスドクの王子田彰夫君(現在、

九大教授)と助手の田中健太郎君(現在、名大教授)を雇用していただき、研究室の立ち上げは彼らのパワーで一気に進んだ。

しばらくして、千葉大から藤田誠先生も着任され、岡崎での錯体化学研究は、生物無機化学、超分子化学、材料化学、有機金属化学などに広く展開されることになった。錯体化学実験施設には、誰でも気軽に入れるオープンサロン(お茶飲み場)があり、少し休憩しに行くと、施設のスタッフや学生ばかりでなく、外部の研究者と学術交流する機会にも恵まれた。岡崎コンファレンスセンターで錯体化学関連のシンポジウムがあるときなどは、オープンサロンは多くの研究者や学生で活況を呈した。これも分子研の良かったところであるが、スタッフの居室は皆隣り合わせであった。晃二先生や藤田先生のところに、ちょっと5分いいですか?と言いながら、議論に花が咲いて2時間も話し込むこともたびたびあった。晃二先生が、二酸化炭素の還元反応とプロトンの関わりをホワイトボードの空いているところにびっしりと書かれ、熱い議論を交わして下さったことは今でも忘れられない。

分子研に来て一番気になっていたことは、どのようにして学生を集めるかであった。大学のように、学部学生が自動的に配属されるわけではないので、1年後の4月までにリクルート活動をする必要があった。幸い、6名の博士学生(総研大)が研究室の一員になってくれたおかげで、全く新しい研究を開始することができた。分子研には3年10ヶ月お世話になったが、新しい芽はなかなか出なかった。一緒に頑張っ

てくれた学生さんも大変苦労されたと思う。しかし、以前の研究テーマをこのときに捨てたことについては、一度も後悔したことはない。「岡崎」ののびやかな気風が、後押ししてくれたような気がする。

「岡崎」から東京へ

東京に移ることが決まった頃、卓球をやったことがある食堂地下に、グラインドピアノがぼつんと入った。毎日のように昼食時に弾きに行った。東京に移ることを決めたことを、ほんのちょっと後悔した。今度は家族4人を車に乗せ(免許は岡崎で取得)、(4+2)トンのトラックと一緒に、岡崎インターから東京に向かった。伊藤所長からは、分子研正門から見た満開の桜を描かれた絵をいただき、千葉の宿舎の玄関に置かせていただいた。分子研には二度もお世話になり、感謝の気持ちを表すのにふさわしい言葉は見つからなかった。

錯体化学の次の世代へ

最初の「岡崎」、の頃に若手だった先生方は、現在は大学の退職年齢前後の方ばかりである。もちろん、ほとんどの先生方は退職後も現役として活躍されているが、取りあえず10年後の錯体化学は大丈夫だろうか、と少々心配になったことがある。しかし、案ずるには及ばないのかもしれない。2017年に分子研正岡研究室の近藤美欧先生(現在、阪大准教授)のお世話で開催された錯体化学若手の会夏の学校(愛知県蒲郡市)には、学生160名、一般23名、講師10名の計193名が参加し、過去最高の規模であった。分子研

が、錯体化学の学術・人事交流の「潮目」の役割を果たしてきたのは間違いないが、現在も直接・間接的に大きな流れが作られていることを確信した。我々が次にすべきことが、明確になった気がする。

最後に

東京に移ってからも、分子研との関わりは続いています。最初の「岡崎」のときの分子研所長だった故井口洋夫

先生には、化学教室の外部評価委員長を務めていただきました。化学東館にお忘れになった木彫りのおしゃれな傘を、東京駅近くのJAXAにお届けしたことがあったのですが、奥様との思い出が詰まった傘だったということで、美味しいケーキを用意して待っていて下さいました。その帰り際に「化学教室を宜しくお願いします」と仰られたときは、東京に移ったことの責任の重さをあらためて痛感し、背筋が伸びる

思いがしました。

最近では、計算機センターの江原先生と共同研究を進めており、米国化学会誌に共著を出せたことは、昨年の大変嬉しいニュースでした。これからも時々、「岡崎」に帰ることを楽しみにしております。



錯体化学若手の会夏の学校 集合写真